

第六章

西ガーツ山脈を越える児童労働

—ウディピ村から街の厨房へ—



西ガーツ山脈を越えるウディピ村出身の子どもたち

一 都市サービス産業の児童労働

最近、都市サービス活動の急速な発展にともない、たとえば、南インドのIT都市バンガロール市や国際金融・通商の中心ムンバイ市などに展開するレストランや高級ホテルの飲食業に従事する児童労働が問題となってきた。かれらはカルナータカ州ウディピ村を出身地とする特定のカースト階層の子らであり、かれらの労働の場はこれら近代施設の中の、厨房の奥に「穢れ」の仕事にのみ従事している。これまで見てきたように、子どもたちの「労働市場」は地理的地域に限定されることが通常の姿である。南インド、シバカシ村のマッチ工女は生活圏のなかの児童労働という性格をもつ。農村立地の地場産業はほとんどが同じ特徴をもつといつてよい。それは同じ生活慣習や母語を共有する社会のなかでのみ、親兄弟と離れて働きにできることも可能となるからである。そこには同じ文化圏の範囲での労働移動という限定がある。ところが、この地理的・文化的地域の枠を越えて幼い子どもたちが移動し、労働につくとすれば、そこにはなんらかの「強制や拉致」など非経済的、反社会的行為が働くと考えられる。あるいは、このような物理的要因とは別に「社会的、宗教的慣習」の要因が潜むと考えられる。

カルナータカ州



本章が扱う児童労働の移動形態は後者の場合であり、最近きわめて顕著に見られる現象である。もともと、その流れは古く二〇世紀初頭、英領インド時代に遡ることができる。当時のボンベイやマドラスなど、都市化が急速に進む過程でウデイピの菜食料理への需要が増大したことがウデイピの子ども達を引き寄せたのである。そこには二章「シバカシ村のマッチ工女」、三章「タール砂漠の児童労働」などの事例と異なり、子どもの所属コミュニティにおけるカーストの排他性や「浄と穢れ」の宗教観念が決定的な影響力をもつ労働移動である。しかも移動の空間距離が地元農村から同一文化圏にある中小都市（ウデイピ市や州第二の都市マンガロール市）へ、さらには近代都市の性格をもつ大都市バンガロール市にいたる場合、または州境を越え子どもにとって異文化社会ともいべき州都チェンナイやムンバイなど急速な都市化を遂げた大都市へと子ども移動が進む。その背後には「食」と「カースト制約」という、古来からの宗教的不文律が少なからず影響している。

本章はこの特異な子ども労働移動が他地域・異文化環境へと、そして大都会の高層ホテルやレストランへと進行する現状を素描し、都市サービス産業の発達が生んだ新たな児童労働の慣習形態と「労働市場形成」の構図を検討したい。「子どもはなぜ、学校に行けな



写真：非合法的な労働現場から NGO によって救出された幼女たち。

場所：ウディピ市郊外の NGO リハビリ施設

撮影：筆者 個人蔵

いのか」。その重層的な障壁の一つ、カースト観念の根源にある宗教的倫理観、「浄と穢れ」が支配する労働慣習を見ることにする。まず、以下に私の論点二題を紹介して本章の問題提起としたい。フィールド調査はこれらに関わる事実の発掘・確認を主眼に行われた。

1 浄と穢れと労働

論点一【ウディピの児童労働問題にはその背後にカースト制度が生み出した「浄と穢れ」の排他性が深く関わっている。】

ウディピ市郊外には、NGO (*The Concerned for Working Children*) の児童労働リハ

ビリ施設がある。そこには、およそ年齢一〇歳前後の幼女たちの集団が生活している。子ども達はかつて、州内各地のホテルや食堂に苦しい日々を過ごした経験を持ち、NGOの手によって救出され、ここに収容された。子ども達の多くは精神的に傷つき、幼いからだは衰え、リハビリを必要としている。子ども達の実家は大部分がカースト階層の最下層、ダリット (Dalits) に属し、NGOによって「救出」された後も親元に帰ることを拒むという。ふたたび強制的に仕事に連れ戻されることを恐れるという。幼い子らは、児童労働から解放された不可触民の子らである。

2 慣習的労働

論点二【ウデイピ村の子どもたちが遠く、言語や文化・生活慣習の異なる地に働く理由や背景には経済的理由を超えて、幼少期の労働をめぐる社会的、制度的慣習のあることが多い。】
開発論の扱う二重経済下の労働移動は都市・農村の賃金格差、移動による期待便益とコストの比較、移動の物理的距離とコスト、さらに都市労働市場に関する情報量などを主とする説明モデルから成り立つ。しかも、移動の意思決定者が家計の主体である成人家長で

第6章 西ガーツ山脈を越える児童労働



写真：ウディピ市にそびえるドラビダ (*Dravida*) 建築様式のクリシュナ寺院 (*Krishna*)。13 世紀建立のクリシュナ神信仰のメッカ。ウディピ菜食料理の発祥の地として巡礼者が絶えない。

提供：ウディピ市広報

あることを念頭においた行動を経済領域の枠内で説明しようとする議論である。ところが、本章が扱うウディピの子どもがなぜ、遠く異文化の社会にしかもホテル・レストランの厨房に働く場を求めるのか、という疑問には答えることはできない。そこにはカースト制に深く根ざした労働慣習がある。そして、菜食料理の「食」と「浄と穢れ」という基本的なカースト観や慣習がある。食の慣習と制度の問題に深く関わるテーマである。

3 菜食料理・「浄と穢れ」・子どもの移動

南インド一帯には都市、農村を問わずいたる所に「ウディピ」(Udipi)料理の名をつけたホテル、レストラン、簡易食堂、さらには路上の屋台などが繁盛しているのに驚かされる。タミル・ナードウ州州都チェンナイ市には高級ホテルから路上・小路の屋台にいたるまで「ウディピ」の地名をつけた郷土料理店が立ち並ぶ。西隣りのカルナータカ州都バンガロール市や遠く離れたマハラシュトラ州州都ムンバイ市でも同じ光景を目にすることができる。南インド一帯の、特にカルナータカ州伝統の菜食主義ベジタリアン料理の代名詞でもある、ウディピ料理とはアラビア海に面した、椰子の緑溢れる静かな町(Udipi)が発

祥の地とされる。ある特定の社会階層の子どもが厨房の雑業を担う。今、活況をみせる都市サービス業の発達が子ども達を呼び寄せるのである。子ども達は険しい西ガーツ山脈を越え、大都会の厨房の労働に吸収されていく。新しい型の労働移動問題が浮かび上がったのである。

二 巡礼地ウデイピの「菜食料理」

南インド、アラビア海に面したカルナータカ州の沿海部、やがてゴア (Goa) に至るというところに小都市ウデイピがある。州第二の大都会マンガロール市から海岸線に沿って国道を北上、二、三時間ほど走ると広大な椰子林の中にクリシュナ寺院をとらえることができる。これが南インドで最も有名なヒンドゥー教寺院の一つ、クリシュナ信仰のメッカである。そして敬虔な信徒の巡礼の地である。ここがウデイピ市 (人口二・七万人、二〇〇一年現在)、ウデイピ県 (人口一一万人、二〇〇一年現在) の中心地である。この事例調査の興味深い問題はいわゆるカースト階層の最低位に属する子ども達も児童労働の形態をとり、特定の飲食サービス業の「労働市場」に登場するという現象にある。これら子ども達へ

の労働需要はウデイピの村々に集中的に発生する。ここには宗教上の戒律「浄と穢れ」と「食」の密接な関係が秘められている。この点は後にふれることにしてわたくしが好んで食した巡礼地の菜食料理を紹介したい。ウデイピ料理はヒンドゥー巡礼地から生まれた菜食料理といわれ、きわめて厳格な宗教上の戒律のうえに成立する料理である。これを食する人はカースト階層の最上位ブラーマン、調理する人もブラーマンでなければならぬ。このルールは厳しく監視され、守られている。料理は原則としてバナナの葉の上に盛る。厨房で働く料理人のうち食材を調達し、搬入・調理の準備をする担当もブラーマン。そしてもう一つの分業ラインには食後の皿洗い、汚物のあと片付け、清掃など「穢れ」の作業に属する労働がある。これがカースト最下位の子どもの役目である。食材も厳格な宗教上の理由から選別される。タマネギ、ガーリックは使えない。もちろん、肉類、魚類、甲殻類はご法度である。宗教戒律から求められ、より厳格な禁止食材は料理マニユアルとしてリストアップされている。具材は基本的に地元の産物に限られる。一例をあげると、サンバー(Sambar) シチュウ料理がある。具材はカボチャとグル(ヨーグルト)を使い、ココナツとココ油をベースにする。インド料理の代表格マサラ・ドサ(Masala dosa)はウデイピ料理から誕生し、今ではインド料理を総称する代表的な品目である。

1 カースト帰属意識

カルナータカ州ウディピ県はアラビア海に面した沿海地域にある。このカースト構成はP・S・ラガベンドラ (P. S. Raghavendra) によると次表のような分類となる。¹⁾

本章では、カースト階層は上位カーストに位置する「ブラーマン」（料理人など）と下位カーストの中の「指定カースト」（最不浄のダリット）との非対称関係に注目する。このカースト階層図は主要なカーストのみをとりあげたもので、それぞれにはまた、多くのサブ・カーストがつながる。それぞれは職業集団であり、またそれぞれの社会を構成する機能的役割を分業する集団がある。表中下位カースト分類の「指定カースト」はウドウピ県総人口約百一十万人（二〇〇一年）のほぼ六・一四%にあたる人口規模である。これは行政区分を単位にみた指定カーストであり、近隣の同一言語カンナダ語圏の人口規模をもとに子ども労働力供給の規模を考えたほうがよい。ところで、カーストの帰属意識は一人ひとりの役割や仕事を相互に確認、承認し、保障、保護するという行為や行動をとまなう。したがって、ウドウピに属するダリット (Dalit) とよばれる最下層の人が村を離れ遠く異文化社会のレストランで労働の機会を得る場合、ブラーマン雇用者との関係は村の社会関係を

表5. ウデネビ県のカースト構成

上位カースト	中位カースト	下位カースト
ブラーマン	上級 (Upper)	指定部族 (ST)
Gauda Saraswath Brahmins (コンカン語を母語とするゴア出身の商業階級)	Bilivas (船乗り、狩人)	Nayak (部族戦士の出身)
	Devadiga (寺働き、楽手)	Marati (マラティ語部族の竹かごつくり)
	Kulhala (壺つくり人)	Kotari (竹かごつくり)
		Chammara (なめし皮つくり)
		Gowdas (農耕)
Vishwakarna (木工職人)		
Buntis (農業従事者)		
	下級 (Lower)	指定カースト (SC)
	Nadiwala (洗濯人)	Dalit (不可触民)
	Mogaveera (漁師)	Koraga (ドラム奏者)
	Seregara (床屋)	Mukhari (楽士)
	Bhandari (床屋)	

注：Scheduled Tribesは記号 (ST)、Scheduled Castes は記号 (SC) として政府公文書や統計に記載されている。これは下位カーストの学校教育や公務員就職の際に優先枠を提供するために設けられた行政的観点からの分類方式である。しかし、最近ではこれらは差別用語として排除され、法律用語タリット (Dalits) 「社会的弱者」に統一されることになる。資料・文献には依然として混乱した使い方がみられる。本表はウデネビ地域という特定の地域に見られるカースト構成を示す。なお、それぞれサワ・カーストの職業集団名 (カッコ内表示) についてはバンガロール大学図書館提供の資料による。

出所: Vegard Iversen, "Autonomy in Child Labor Migrant," World Development, 30, 5: 2002.

そのまま維持することが必須とされる。カースト帰属意識とはそのような自他のカースト関係を認識し、尊重することを意味する。

2 法規制の限界

かつて不可触民 *Untouchables* と呼ばれ、いまでは法律によつてダリットの名称で区分されるカースト制の外に位置づけられる人々を保護するために、一九五五年制定の「The Untouchability (Offences) Act of 1955」がある。さきに述べたように、これらの人々を物理的に迫害、差別することを禁じた法律である。ブラーマン経営の食堂に入室を拒否するなど、明らかに物理的に拒絶するような行為を厳しく禁じたものである。しかし、不可触民への差別、迫害、執拗な排除行為など社会生活のあらゆる面で反ダリットの傾向は増している。これに対するダリットの抵抗もはげしくなる。

もう一つ、「児童労働〔禁止・規制〕法―一九八六」は、すでにのべたように、初等教育学齢期の子ども（五歳～一四歳）の労働を禁止している。法律が制定され、すでに二〇数年を経過したがウディピの子どもは果たして、西ガーツ山脈の峠越えをすることなく学校に

戻ることができただろうか。新聞報道はつぎのように報じている。バンガロール市は「条例により二〇〇六年一月一〇日までに市内のホテル・飲食店から児童労働を一掃する」予定である、と。しかし、雇用者は子どもの年齢を一四歳以上、あるいは家族関係の者と偽り、家事手伝いと主張する。子ども達はバンガロールに溢れる (*The Hindu*, 04/10/2006, “Despite Looming Deadline, Child Labour is Rampant in Bangalore”)。そして、ムンバイ市は「ムンバイの料理メニューの背後に子ども達」と題して、「ウディピ料理店のオーナーは誰もが、児童労働は罪ではない、むしろ社会奉仕だと答えている」と公式見解を発表している (*IBN Nov. 10, 2006*, “Children behind Mumbai Menu”)。

3 浄と穢れと労働の分業

ニールギリ山地ウーティに近い小都市のレストランで観察した事例を紹介したい。私と同行する地元出身の社会学者はカルナータカ州出身の厳格なベジタリアン。着席と同時に一人のボーイ長とも見える男が近寄り、ベジタリアンか否かを確認する。わたくしがベジタリアンでもあるしノン・ベジタリアンでもある、と答えると同行の友人は即座に私の言

葉を制して「二人とも厳格なベジタリアンだ」と現地の言葉で答えていた。わたくしがノン・ベジタリアンなら二人は部屋を別にすることになる、とのことだ。まず食事の「場」が峻別されていることを知った。制服姿の子どもが二人ほど部屋の隅で待機している様子が見える。ボーイ長が注文をとり、料理皿は制服姿の子どもが配膳する。ボーイ長は厨房に戻っている様子なのですかさず子どもに質問を連発する。出身地、家業、年齢、カースト、就職斡旋人など。このような質問に対する店側の警戒心は年毎に厳しくなる。今回（一九九八年）もそうである。子どもとの会話が長引く様子が知れると、すばやくフロア・マネージャーらしき男が慇懃無礼にもその会話の場面を遮断する。子どもに厳しい目をむけている。おそらくあとで叱責されるかもしれない。二人目もかろうじて聞き取りに成功する。客と接触できる子どもは二人だけなのである。二人に共通することがある。出身はウディピ県、しかし村は異なる。小学低学一年（クラス）を終えたとすぐに、村を出る。年齢一一歳（六歳から働き始め、すでに五年間勤める）。カーストは指定カーストという。就職斡旋は村外からの業者だという。食事を終えカウンターで支払いを済ませる様子をみせながら厨房を覗き込む。一瞬さえぎられるが、なかば強引に中に入り込むと皿洗いに専念する三人の幼児、年齢はおよそ五、六歳ほどの姿があった。厨房のもつとも「穢れた」仕事

場に働く児童労働の現実がここにあった。その後、移動途中に立ち寄るレストランや簡易食堂でも同じような場景を目にした。ウディピ系統フランチャイズ店の従業員はそれぞれの仕事の役割分担ごとにユニホームが異なる。仕事は、注文取り、配膳サービス係り、調理人、そして皿洗い、汚物処理などに分業、固定化されている。これが「最浄のブラーマン」、「最不浄の不可触民」のカースト階層区分と直結し、「穢れ」という排除の観念が物理的な抑圧の原理と化したのである。ウディピの働く子どもを支配し、いまだに生きる慣習の恐ろしさを垣間見る思いであった。

三 なぜ、ウディピの子どもか

厳格な菜食料理を生み出したウディピ巡礼地を覆う宗教戒律の厳しさはカースト間の、いわゆるインターダイニング (inter-dining) を禁止する慣習に見ることができる。ウディピ市にあるクリシュナ寺院を中心に巡礼地らしい寺町が広がる。あるブラーマン専用の食事処の事例である。経営者は厳格なブラーマン家族の出身、代々この地で食堂を営んでいる。従業員はすべて姻戚関係にあるブラーマンという。提供する料理はブラーマン御用達

の品々ばかりである。同行の知人研究者によると、食事メニューには具材の詳細とカロリーが表示され、そこには「ブラーマン料理の調理上のルールを満たしています」と地元カナダ語の特段の大きな活字体で注意書きしてある、という。それはブラーマン菜食料理の純粹専門店であることを強調するためである。逆に非ブラーマンの客には飲食を断ることになる。巡礼者から、のどの渇きを癒す一杯の水を乞われても、非ブラーマンの場合は入室さえ拒否し店の外で接客するという。物理的に非ブラーマンを排除・抑止する原理が働くのである。このようにブラーマン階層の「最浄—purity」を守るためには不可触民の「最浄」を「穢れ—pollution」たものとして物理的に排除しておかねばならない。

このような排除の観念が慣習化した世界が今も、クリシュナ寺院の寺町に実在しているのである。「穢れた」階層の児童労働はこのカースト階層固定化の一つの現れでもある。数日間、寺町一帯の食堂や高級老舗の専門店を巡り、ほぼ同じような食のこだわりとカースト慣習とのつながりがあることを知ったのである。私はウディピ県の内陸部、いくつかの農村と中間都市を訪ねるにあたりつぎのような仮説を組み立てた。同行したインド人の社会学者はそのような問題設定はステイティック（静態的）であり、現在進行中のもろもろの変化を取り込んだ「動態的」説明とはならない、と同意することはなかった。

①「最浄」菜食料理はウディピ料理として宗教性の極意を達成した普遍的価値をもつ。したがって、地域料理にとどまることのない、国内はもちろん、世界中のすべてのヒンドゥー社会に愛好されるはずの料理である。ブラーマンの生活する所、全世界にいたるまで品格ある料理として食されるはずである。

②宗教的戒律の条件を維持するためには食の「かたち」を守る必要がある。そのために、「最浄」のブラーマン階層に貢献し、「最不浄」の「穢れ」た階層を「食の場」において物理的に峻別し排除しなければならない。

③「食」の穢れの部分は「最不浄」の階層が担う役割である。これが「穢れ」の階層の子どもの仕事である。これをひろく、メッセージとして伝える「ウディピの子ども」は食の「霊性」を確保するためにどうしても必要な民である。したがってウディピ出身の子どもが物理的に、どこの町の厨房にも必要とされる、と。

事例調査の主眼点は「食」慣習のなかの「カーストを基本とする雇用関係」を大略で確認すること、そして「ウディピの子どもが必要とされる慣習的労働の意味」を明らかにすることにある。このような観点から、およそ三つの異なる地域・都市のホテル・レストランを選び、そこに働くウディピ出身の子ども合計三一人を対象にしてつぎの項目についての

資料を作成した。調査の内容は、①観察方法によるもの—厳格なベジ料理／レシピの料理内容記載の有無／座席区分の有無。また、従業員のカースト識別（着用ユニフォーム、分業ラインの識別、皿洗い、土間清掃）。②聞き取りによるもの—出身地（村）・教育の有無（最終学年）・カースト・就業年齢・就労斡旋。また調査対象のサンプルは表6に記した。

インド連邦国家は言語を単位とする、いわゆる言語州をもつて構成されるから、母語（カ
ンナダ語）と民俗・慣習が共通のカルナータカ州内はウディピ村の子どもの移動にとま
う摩擦が少ないと考えてよい。都市の規模や機能の観点から州都バンガロール市、第二の
大都市マンガロール市、ついでマイソール市のホテル・レストランを選ぶ。ウディピ料理
の老舗料理が評判のホテル・レストランが対象となる。つぎに、子どもの移動距離と社会
的・文化的距離、言語、民俗、慣習などの観点から子どもにとって異質な社会として、近
隣のタミル・ナードゥ州とマハラシストラ州、それぞれの州都を選ぶ。両都市には無数
のウディピ料理の専門店が営業している。レストランの格式、歴史もさまざまである。子
どもにとってまったくの異国ともなる異文化の社会、チェンナイとムンバイにはたしてウ
ディピ村の子どもは働いているだろうか。ホテル・レストランに働く子どもの姿をみつけ
るにはさほどの時間と労力を要することはなかった。ホテルの選定さえ間違えなければさ

表6. 調査対象の分類

州、市、場所	人数
1. カルナータカ州(言語・民俗・慣習の同一性基準)	
①バンガロール市、ホテル・レストラン	3
②マンガロール市、ホテル・レストラン	6
③マイソール市、ホテル・レストラン	2
2. タミール ナードゥ州(言語・民俗の異質性基準)	
④山地避暑地 (Ooty) 農村、ホテル・レストラン	3
⑤チェンナイ市、ホテル・レストラン	3
⑥チェンナイ郊外、リゾートホテル	2
⑦チェンナイ市内、レストラン(一般市民用)	4
3. マハラシュトラ州(言語・民俗・慣習の異質性基準)	
⑧ムンバイ市、ホテル・レストラン	2
⑨ムンバイ市内、レストラン(一般市民用)	6
総計	31

出所：聞き取り調査に基づき筆者作成。

ほど難しいことではない。

事例調査の対象者は結果的に合計三一人となる。二年間にわたり都合四回のホテル滞在型の、観察と聞き取りの調査である。全員が広くウディピ県の村々の出身者で占められており、子どもの年齢は一〇〜一五歳の範囲にある。就労の経験は、およそ小学校一、二年時に学業を放棄して労働仲介人の世話で働き口を得た事例がほとんどである。

南インド一帯の三州に展開するウディピ村(地域)出身の子ども達を対象にした調査結果の概要は、ほぼ、つぎの六点に要約することができる。三州への、ウディピ村からの子どもへの移動は地理的距離、また言語・民俗・慣習の異質性などの基準に照らしても「なぜ、ウ

ディピ村の子どもか」の設問には答えられない。はじめに述べた通り、幼い子どもが親や家族の生活圏から一人、遠く離れて、異文化社会の厨房に働く根拠をみつけることはできない。通常、われわれの知る労働移動の理論はこの事例の根拠を説明することはできない。三州の事態に共通する理由はカーストの排他性、つまり、「食と浄と穢れ」の原初的問題に深くかかわっていることを認めざるを得ない。古くして今もなお、問われるカーストの帰属意識の問題がある。

①ウディピ菜食料理には前期ベータ時代（前一五〇〇〜前一〇〇〇年ごろ）からの伝統の魅力があり、広く菜食を好む多くのヒンドゥー教だけでなく異教徒にも愛されてきた。ウディピ料理はウディピの地においてクリシュナ（神）に献上した菜食料理をその起源とすると信じられ、その食の「靈性」が重んじられてきた。先に述べたように、「最浄」の料理は「最浄」階位にあるブラーマン料理人により調理されたものであり、これを食する顧客もまた、同位の階位にあるものに限られる。この関係図は料理人と顧客は同一のカースト関係をもつこと、そして、「食」を作り出す厨房の料理人たちはブラーマンであり、食事の場で顧客に接する給仕人も同じくブラーマンの階位に属する者が求められる。そして、食後の廃棄物、ごみ処理、皿洗いなどの「穢れ」の仕事はすべて「最不浄」の

民、ダリット階層の子どもの仕事となる。これが「食」と「カースト規範」の不可分の関係を示す純粹な形といわれる。ウディピの農村部にはこの関係図が今も厳格に守られているという。

②ウディピ料理店はその規模の大小を問わず、料理店主や料理人は、出身地ウディピ村と同郷のダリット階層の子どもを必要とする。店の経営と所有はブラーマン夫婦の個人であって小規模の家族経営の形態をとり、親族、知人、友人などの関係にある同郷の子どもが選好される。これは擬似家族の雇用関係を意味し、ときには幼い子どもの雑役労働を「家事労働」、「手伝い」などと偽装することに役立つ。

③「食」と「浄穢れ」のカースト関係は維持されながら、子どもの働く場が巡礼者への宿泊や食事サービスを主に提供する農村部の宿や食堂などの場合、雇用主と子どものカースト関係は厳しく維持されている。つまり、ブラーマンに対する宿泊と食事サービスの提供は伝統を厳しく守り、古代インドヴェーダの時代から継承した (Vedik) 菜食料理に徹し、その食の正当性や伝統の偉大さを宣伝・広告をする。もちろん、「穢れ」の仕事はダリットの幼い子らの領分、薄暗い厨房の奥深くに人目をはばかるように働く姿がある。

④州内の比較的大きな都市になると、営業規模も多少大きくなるがブラーマン夫婦の家族

企業であることに変わりない。店主・料理人と子ども達のあいだのカーズト関係は先に述べた擬似家族のそれと比べいっそう巧妙になる。わたくしの調査によれば、店主・料理人の子どもとしてカーズト背景を隠蔽し、また、家事手伝いを装うという法律逃れの便法策をとる。同郷の出身者の利点である。九〇年代後半になると都市部の飲食店などに官憲による児童労働摘発の動きが高まるが、「一九八六年—児童労働禁止・防止法」の適用をうけ裁かれた事例は皆無という。さらに、州都バンガロール市や隣接州のチェンナイ市やムンバイ市にも同じような事例をみることができる。これらの都市では経営規模も大きく、複数の職種にわたる複数の従業員を雇用しているので、雇用主と子ども従業員とのカーズト関係は変わることはないが、しばしば地元のダリットを働かせていることが多い。基本的には上位カーズトと中位カーズトの構成で料理の食材調達・調理配膳を、そして、廃棄物の処理、皿洗いなどの後片付けはすべてカーズト外の不可触民の子ども達があたる。この基本型は変わることはない。

⑤近年、都市発展の著しい南インドのチェンナイや北西部のムンバイでは都市化や工業化にともない、人種構成や生活環境は大きく変化し、「食」に対する考えも多様化する。一つのレストランで菜食料理、非菜食料理はもちろんのこと、人気のある中国料理、さらに



写真：国際金融の街ムンバイ市マリンドライブ通りのウディピ弁当宅配。
撮影：筆者【写真番号：04.002】

はエスニック料理さえ提供しなければ競争できない。このような需要変化に対応して伝統のウディピ菜食料理は厳格なカースト規範を維持できるだろうか。「市場変化」、「食」と「カースト規範」の関係の如何がいわば、「クリシュナ神への献上料理」創造の最終工程を担うダリットの労働に大きく影響を及ぼすに違いない。これから進行するであろう社会変動が以上に述べたような「食」と「カースト規範」の関係図にどのような影響をもたらすか、あるいは不変なものなのか明らかにするまでは、今しばらくの時間を要すると思われる。従って、ウディピ料理に関わる児童労働の問題は以上の関係図とその脈絡のなかで初めて正確な位置づけができるのではないか

と考える。

⑥各地にこのようにウディ・ピ菜食料理というきわめて宗教上の靈性が付与された「食」と、料理人その他の従業員の間にある「カースト関係」、その背後にある「浄と穢れ」の思想、そして、カースト制度の外にある階層ダリットという「不可触民」児童労働が相互連関する世界が広がりを見せていることに驚愕する思いがあつた。経済進歩の象徴IT都市バングロール市の老舗ホテルにも、国際金融の中心都市の一つムンバイ市の高級ホテルにも、また歴史を誇るウディ・ピ料理のレストランにも同じ世界を見たのである。ウディ・ピ村の子どもは今も、間断なく西ガーツ山脈を越えて東はITの街バンガロールへ、また北は繁栄を続ける国際金融の街ムンバイへと移動を続ける。徒歩とバスを乗り継ぐ、インドのもう一つの「野麦峠」越えである。

注 (一) 労働慣習

本章の問題と関連する文献三点を挙げる。両筆者の現地調査は、私のそれとほぼ同じ時期にあたる。人類学者と社会学者によるフィールド・ワークの成果であり、参考とするとところ少なくない。カルナータカ地域のカースト分類は下記論文(2)の執筆者の一人 P. S. Raghavendra による (P. 320)。

- (i) Vegard Iversen, "Autonomy in Child Labor Migrants", *World Development*, 30, 5: 2002, pp. 817-34.
- (ii) Vegard Iversen and P. S. Raghavendra, "What the Signboard Hides: Food and Employability in Small South Indian Eating Places", *Contributions to Indian Sociology*, 2006: 40, 311, pp. 311-41.
- (iii) Mintz, S. W. and C. M. Du Bois, "The Anthropology of Food and Eating", *Annual Review of Anthropology*, 2002: 31, 99-119.

(2) 穢れ—排除の観念

- 小谷汪之著「罪の文化——インド史の底流」(東京大学出版会、二〇〇五)。
- 森本達雄著「ヒンドゥー教——インドの聖と俗」(中央公論社、二〇〇三)。とくに、第IV章「ヒンドゥー教のエートス」参照。

Mayer, Adrian, "Caste in an Indian Village: Change and Continuity, 1954-1992", in *Caste Today*, edited by C. J. Puller (New Delhi: Oxford University Press, 1997), pp. 32-64.